

体験用民具リストは、1『生活用具』、2『農具』、3『戦争関係』、4『青銅器』、5『消防関係』の5つに分けて掲載しています。

### 1 生活用具(太線囲みの資料は一緒に使うものです。)

体験用番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
1-01	釜(かま)一式		2	釜(かま)1、蓋(ふた)1 C(実用可) 使用する場合洗うこと	竈(かまど)の上に釜を据えて、湯沸かし、飯炊きなどに使用しました。炊飯釜は鏝(つば)の上部が大きくて吹きこぼれないようにできており、また、これには分厚い木蓋がのり、炊きあがったご飯を十分に蒸らせるようになっています。
1-02	一合枴(いちごうます)		2	C(実用可) 使用する場合洗うこと	穀物や食塩、酒、しょうゆなどをはかるときに使用した枴です。一合は180ccです。
1-03	箱膳(はこぜん)		1	B(触るだけ)	上蓋を裏返して箱の上に置き、中から取り出した椀や皿をその上に載せて食物を盛り、膳として使いました。食事のあとは、椀や皿に湯を注いでゆすぎ、そのまま箱膳に収納します。食事の度に椀、皿を洗う習慣はなく、月に数回洗うのみでした。
1-04	焙烙(ほうろく)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	鉄輪(五徳)や竈にのせて、あぶったり焼いたりする器です。多くは浅い皿の形で、豆類、穀物、茶、胡麻、塩、薬物に用い、魚や餅を焼くときにも使われました。
1-05	汁テンボ		3	C(実用可) 使用する場合洗うこと	吸い物、味噌汁などを入れておく木製の桶です。冠婚葬祭など大勢の人に食事を出すときに利用しました。
1-06	貸徳利(かしとっくり)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	酒屋が小売り用に貸出す陶磁製の徳利で貧乏徳利、通い徳利ともいいます。売酒は付け買いが一般的であったため、酒銘、地名、電話番号などを記してあり、一種の宣伝容器でもありました。
1-07	片口(かたくち)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	片側に注ぎ口をもつ器で、液体(酒や醤油)を小分けにするのに用いました。
1-08	すり鉢(すりばち) ※すりこぎなし		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	ごますり、味噌摺り、あえ物、とろろなどの調理のために、すり潰したり混ぜ合わせたりする鉢です。

1-09	ボロ煎り(ぼろいり) 、豆煎り		2	C(実用可) 使用する場合洗うこと	豆などを直火で炒る道具です。
1-10	お櫃(おひつ)		4	C(実用可) 使用する場合洗うこと	炊きあがった飯を釜から移し、保温しながら食膳に運ぶ道具です。
1-11	イズミ		1	B(触るだけ) ※中にお櫃あり	おひつごと保温するための容器です。野良仕事の時もイズミにおひつを入れて昼飯用に持っていきました。
1-12	膳(ぜん)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	今日のようにテーブルが普及する前は、膳を使った食事が主流でした。
1-13	平椀(ひらわん)		10	C(実用可) 使用する場合洗うこと	底が浅くて平らな椀で、煮物などが盛られます。
1-14	鯉節削り器 (かつおぶしけずり き)		1	B(触るだけ) ※刃に注意	鯉節を削る道具です。刃を手前に向けた鯉節削の上に手のひらで鯉節を押さえ、向こうに押しとききに力を入れ、身の流れに沿って薄く削ります。削ったものは下の引き出しにたまります。
1-15	ハンゾ		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	足の付いたたらいで、洗面道具のひとつです。
1-16	タライ		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	水や湯を入れて課を屋手を洗う円形の容器です。
1-17	洗濯板(せんたくいた)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	たらいの中に洗濯板を入れ、石けんを付けた布をこすりつけて汚れを落とします。
1-18	手回し洗濯機 (せんたくき)		2	C(実用可) ※1点は取っ手なし	タンクに洗剤と湯(40~80度)を入れ、洗濯物を入れます。ふたをしめてハンドルで10~20秒ぐるぐる回します。タンク内はお湯で空気が膨張して気圧が高くなります。その圧力で洗剤をふくんだお湯が繊維の中までしみこんで汚れを落とすというものでした。

1-19	伸子張り(しんしばり)		1	B(触るだけ)	反物の状態になった布地の両端を張手と呼ばれる棒で挟み、間を等間隔で竹製の伸子(竹ひごの両端に針がついているもの)を打ち、糊付けをして乾かします。主に絹の着物に使いました。
1-20	炭アイロン (すみあいろん)		4	C(実用可)	炭火を入れ、その熱と重みで衣服のしわを伸ばしました。炭火が消えないように円筒と下部に空気穴があります。後ろの窓の開閉で温度調節できます。
1-21	手回しミシン		1	B(触るだけ)	手動式のミシンです。
1-22	鋺(こて)		1	C(実用可)	先端を加熱し、着物の仕立てや細かい部分のしわを伸ばす時に使いました。
1-23	火熨斗(ひのし)		3	C(実用可)	炭火を器に入れ、器の重みや熱で衣類のしわを伸ばしました。器の多くは真鍮製(しんちゆうせい)で、持ち手は木製です。1000年以上前から使われていた道具です。
1-24	蚊帳(かや)		1	B(触るだけ)	四隅を天上やはりに吊って、寝床を覆い、蚊を防ぐものです。麻や木綿などで作られています。
1-25	火鉢(ひばち)		2	C(実用可) 灰なし ※1点陶器製、1点木製	中に灰を入れ、炭火をおいて手を暖めました。火鉢は暖を取るだけでなく、五徳を立てて鉄瓶で湯を沸かしたり、鍋で調理したものを温めたりすることもできました。
1-26	キセル		1	B(触るだけ) ※ふき取り必要	刻みたばこ用の喫煙具です。
1-27	箱枕(はこまくら)		1	A(観るだけ)	布団の外に置いて用いるために台が高くなっており、結った髪型が崩れないように女性が多く使用しました。
1-28	わら草履(わらぞうり)		1	A(観るだけ)	わらで作った履物です。
1-29	ハエとり棒(はえとりぼう)		1	B(触るだけ) ※劣化していて折れたり、割れたりしやすいので、運搬用の紙製筒からの出し入れに注意	壁や天井に止っているハエを捕まえるための道具です。端の袋状部分に水を入れた状態で、ラップ形の口に止っている蠅を当てると蠅が落ちる仕掛けです。

1-30	ハエとり機		1	A(観るだけ)	四角柱にハエの好物である酒・酢・砂糖を混ぜたものを塗っておきます。そこにハエが寄ってきて止まります。四角柱は、ゼンマイ仕掛けにより自動回転しているので、ハエは暗い箱の中へ閉じ込められます。また、網側の側面には窓がついていて、外の光を取り込めるようになっています。ハエは明るいところに集まる習性があるので、自然を網の方へ入っていきます。この仕掛けは、1回のネジ巻きで10数時間は動きます。
1-31	扇風機(せんぷうき)		1	B(触るだけ)	家庭に普及した当初の扇風機です。
1-32	押し寿司器(おしずしき)		3	B(触るだけ)	箱に入れて作ることから「箱寿し」、箱を重ねてツメ木を使って重しをするので「押し寿し」とも呼ばれ、秋祭りの時などによく作られていました。すしの具は、ボラのくずし身、たまごの薄焼き、ちくわ・かまぼこの煮たもの、めじろ(あなご)などです。
1-33	蒸籠(せいろ)			C(実用可) 使用する場合洗うこと	穀物などを上記で蒸すための道具です。
1-34	杵(きね)		2	C(実用可) 使用する場合洗うこと	
1-35	臼の台(うすのだい)		1	B(触るだけ)	餅つきの道具
1-36	臼(うす)		2	C(実用可) 使用する場合洗うこと ※重いものなので、来館されて見学されることをお勧めします。	
1-37	弁当箱(アルマイト製)		1	B(触るだけ)	アルミニウムの表面に皮膜処理を施した弁当箱で、プラスチック製が普及する前は主流でした。
1-38	陶器製湯たんぽ (とうきせいゆたんぽ)		1	B(触るだけ)	身体を温めるために湯を入れて布で包んで使います。就寝中に寝床に入れます。

## 2 農具

番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
2-01	あぜ切鎌(あぜきりがま)		1	B(触るだけ) ※刃の部分に注意	あぜを切る道具です。
2-02	株切り(かぶきり)		1	B(触るだけ) ※刃の部分に注意	原野開墾の際に、もっぱら切株・竹根などを切り起こすのに用いました。
2-03	炭俵(すみだわら)		3	B(持ち上げたり、触るだけ) ※来館されて見学されることをお勧めします。	木炭を入れて保管したり、運搬のために入れる俵です。
2-04	風呂鍬(ふろぐわ)		1	B(触るだけ)	「風呂」と呼ばれる木製の刃床部に鑄鉄の刃先をはめ込む構造のもので「平鍬」ともいいます。柄はカシなど堅木で作られています。鉄が貴重であったため、刃先のみ鉄が合接されています。
2-05	天秤棒(てんびんぼう)、 肥桶(こえおけ)一式		1	肥桶(こえおけ)2、天秤棒(てんびんぼう)1 C(実用可) 使用する場合洗うこと。 天秤棒にかける程度	竹籠で収穫物を運んだり、水桶、肥桶など様々なものを運ぶことができます。
2-06	足踏み脱穀機(あしぶみだっこき)		1	C(実用可) ※大きいものですので、来館されて見学されることをお勧めします。	踏み板を踏んでドラムを回し、ドラムの針金に稲穂を押し当ててもみをしごき落とします。ぬかが飛び散るため、むしろなどで覆いをして作業しました。
2-07	雁爪(がんづめ)		1	B(触るだけ)	四つんばいで稲株の間ごとに刃を打ち込み手前に土を返し、草を取り除く道具です。
2-08	除草機(じょそうき)		1	B(触るだけ)	押し引きして刃を回転させ、稲株の間の雑草を取り除く道具です。
2-09	土入れ機(つちいれき)		1	B(触るだけ)	麦作に用いるもので、麦が穂を結ぶ前に株の間に土を振り入れる道具です。
2-10	稲刈機(いねかりき)		1	B(触るだけ)	V字型の刃を稲株に押し当てるようにして稲を刈り、柄のレバーを引くこと、曲がった金属部分で刈った稲を束ねる仕組みです。
2-11	篩(ふるい)		1	B(触るだけ)	粉状のものを入れて振って、網目を通る細かいものをより分ける道具です。

2-12	粃ならし(もみならし)		1	B(触るだけ)	むしろにもみを均等に広げる道具です。
2-13	唐箕(とうみ)		1	C(実用可) ※大きいものですので、来館されて見学されることをお勧めします。	風力を利用して脱穀後の粃からゴミや藁くずを取り除いたり、粃摺り後の玄米から粃殻を取り除いて選別する道具です。
2-14	一升枡(いっしょうます) (右) ※参考 一合枡(左)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	穀物や塩、酒、しょうゆ、酢などの体積を量るのに使います。基準となるのは一升枡(約1.8ℓ)、その10倍が一斗枡(約18ℓ)、10分の1が一合枡(約180cc)です。
2-15	一斗枡(いっとます) 一斗枡棒(いっとますぼう)		1	C(実用可) 使用する場合洗うこと	
2-16	竿秤(大) (さおばかり)一式		2	竿(さお約1.5m)1、分銅(ふんどう:10kg)1 C(実用可)	竿の先端にかぎがあり、その近くにとり手がかり、それを支点として、はかる物体をかぎにかけ、竿の反対端にかけた分銅を竿が水平になるまで移動させ、その位置の目盛を読んで重量を計ります。
2-17	竿秤(小) (さおばかり)一式		1	竿(さお)1、分銅(ふんどう)1 C(実用可)	
2-18	鋤簾(じょれん)		1	A(観るだけ)	土砂などをかき寄せる道具です。
2-19	綿繰機(わたくりき)		1	B(触るだけ)	綿花を実と綿毛とに分離する道具です。座って行う手回し式のものです。
2-20	草履台(ぞうりだい)		1	C(使い方難しい)	草履を編むための道具です。

### 養蚕関係の道具

番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
2-21	桑籠(くわかご)		1	B(触るだけ)	蚕に与える桑の葉を運ぶ大型の籠です。

2-22	桑摘籠(くわつみかご)		1	B(触るだけ)	蚕に与える桑の葉を運ぶ小型の籠です。腰につけるものが多いです。
2-23	蔴織機(まぶしおりき)		1	B(触るだけ)	上からわらを挟み、側面のハンドルを交互に倒して藁を押さえ込むことによって蔴を作ります。蔴はわらを山形に交互に折り曲げたもので、繭(まゆ)を作るための足場となります。
2-24	円座(えんざ)、 円笊(えんざる)		1	B(触るだけ)	むしろざるともいいます。竹をカゴ目に編んだ上に籐を固定し、この上で蚕を飼育しました。
2-25	繭織機(まゆおりき) 繭の毛羽取り機(まゆのけばとりき)		1	B(触るだけ)	繭ができると、この道具を使って羽毛を取り除き、きれいにした後出荷しました。竹棚の上に繭をのせて、手回しのハンドルを回して棒を回転させ、羽毛(蚕が繭を作る際、最初に掃き出した糸)を巻き取ります。

### 3 戦争関係

番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
3-01	木銃 (もくじゅう・きじゅう)		1	B(触るだけ)	木で銃の形に作ったもので、銃剣術の練習用として使われました。
3-02	奉公袋(ほうこうぶくろ)		1	B(触るだけ)	軍隊に入営した者が各自所持して必要な書類やこまごました身の回りの物を入れた木綿製の袋です。
3-03	鉄兜(てつかぶと)		1	C(かぶる程度)	弾丸・落下物などから頭部を保護する鉄製の帽子です。
3-04	背のう(はいのう)		1	B(触るだけ)	軍人・学生などが物品を入れて背に負う方形のかばんです。
3-05	防空頭巾(ぼうくうずきん)		1	B(触るだけ)	空襲などの時に落下物から頭部を保護するために頭にかぶった綿入れの頭巾です。

3-06	漏斗(じょうご・ろうと)		1	B(触るだけ)	筒口を瓶・徳利・壺などの口にはめ、上部から酒・醤油・油などの液体を注ぎ入れるのに用いる器具です。金属を供出したため、代用品として陶器で作られたものです。
3-07	ゲートル(1対)		2	C(実用可)	足を守るために足に巻く帯状の布です。主に歩兵が着用しました。戦場では、応急処置の包帯がわり、骨折した手足をしぼるヒモがわりにもなりました。
3-08	もんぺ		1	C(触るだけ)	着物を仕立て直して作ります。もとは農村の作業着でしたが、戦時期には動きやすい活動衣として使われました。

#### 4 青銅器 博物館外への貸出は、学芸員が同行する場合のみ可能です。

番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
4-01	銅鐸(どうたく)		1	B(触るだけ)	青銅製の鐘の一種で、内側に舌という棒をぶらさげ、それを動かして音を鳴らします。青銅とは銅に錫や鉛をくわえた合金です。(弥生時代)
4-02	銅戈(どうか)		1	B(触るだけ)	柄の先端近くの側面に柄と直角の方向に刃を取りつける武器です。このように武器の形はしていますが実用性がなくなった青銅器を武器形祭器といいます。(弥生時代)
4-03	銅剣(どうけん)		1	B(触るだけ)	剣形の青銅器です。時期が進むにつれて大きくなるかわりに薄くなっていきます。(弥生時代)
4-04	銅鏡(どうきょう)		1	B(触るだけ)	鏡の裏側(鏡背)には神獣などがあらわされています。また、鏡のふちが山形にとがっていて、断面が三角形になっていることから、三角縁神獣鏡といわれています。(古墳時代)
4-05	銅矛(どうぼこ)		1	B(触るだけ)	長い柄の先端に差し込んで敵をつき刺すヤリのような武器です。(弥生時代)

## 5 消防関係

番号	名称	写真	点数	利用の限度	詳細
5-01	刺し子の半纏 (さしこのはんてん)		4	C(着用可)	刺し子の半纏は柔道着のように丈夫です。服装が藍染めなのは燃えにくいことによるものです。明治から昭和30年代まで、消防団員はおおよそこのような服装で消防活動に従事しました。
5-02	刺し子のズボン		4	C(着用可)	
5-03	腹掛け		4	C(着用可)	
5-04	水鉄砲 (長さ: 水を押し出した段階で、約90cm程度 水は8m前後飛ぶ)		4	C(実用可) 使用前に、押し棒の先の薄い布部分を水につけておくと、密封性が高まり、使いやすくなる。	現在の自転車の空気入れのような構造で、水の入った桶に入れて下から水を吸い上げて使用します。

### 凡例および注意事項

- ※この体験用民具リストは、**令和3年年12月末現在**のものであります。
- ※利用の限度は、A見るだけ、B触るのみ可、C実用の3段階です。
- ※劣化している資料も多くあります。取り扱いに十分ご注意ください。
- ※使用して汚れたり、濡れたりした場合は、可能な範囲で、洗ったり、拭き取るなどして返却してください。